

グリム、アンデルセン童話の発見（上）

——日本における近代児童文学の出発点

川戸道昭

最近、日本の歴史をぬりかえるような考古学上の発見が相次いでいるが、文学史の世界においても、従来の常識をくつがえし、新しい歴史の書き換えを迫るような発見がないわけではない。たとえば、日本の近代児童文学の成立と深く関わるグリムやアンデルセン童話の翻訳資料の発見などもその一つだろう。これまで、日本におけるアンデルセンの翻訳は、明治二十一年二月に『女学雑誌』に掲載された「不思議の新衣裳」が最も古いとされてきた。それは、一九六一年に福田清人氏が『児童文芸』に「アンデルセンの最も早い紹介」として発表して以来、今日なお児童文学界の常識となっている。一方、グリムの翻訳に関しては、戦前からその存在が知られていた菅了法訳『西洋古事 神仙叢話』（明治二十年四月刊）が本邦初訳とされており、子どもを対象とした作品としてはその五カ月後に発行された呉文聡訳『八ツ山羊』が最も古いということになってきた。それが今日なお変わっていないことは、明治期の児童文学に詳しい桑原三郎氏が、岩波文庫の『日本児童文学名作集』（一九九四年）の解説の中で、「呉文聡の「八ツ山羊」は、グリム童話を日本で始めて子供のために紹介した作品であるし、『女学雑誌』の「小供のはなし」欄に載った「不思議の新衣裳」はアンデルセン童話の初めての紹介でもあった」と述べているのを見てもわかる。

ところが、最近、この四十年来の常識をくつがえす新たな資料が発見された。それは、明治十八年六月創刊の『ROMAJI ZASSHI [ローマ字雑誌]』に掲載された翻訳で、詳しい号数や作品名を記すと、十一号（明治十九年四月刊）にグリムの「羊飼いのわらべ」が、十八号（明治十九年十一月刊）にアンデルセンの「王の新しき衣裳」がそれぞれ掲載されている。ともに明治十年代の翻訳であるという点が注目されるが、それ以上にわれわれの注意を引くのは、最初の「羊飼いのわらべ」が載ったのが、同誌に常設されていた「子どものため」という欄であったということである。明らかに、これは読者として子どもを想定した翻訳であり、『女学雑誌』の「小供のはなし」欄の先駆をなすものである。言いかえれば、これらの新発見の資料は、単にグリム、アンデルセンの本邦初訳の年を一、二年遡らせるというだけではなく、子どもを対象とした読み物の歴史に新たな光を投げかける貴重な文献でもあるということになる。日本の近代児童文学が、グリムやアンデルセン童話の紹介とともに夜明けを迎えるという事実を再確認する上でもまたとない資料のように思われるので、以下にその内容の一部を紹介し、初期の児童文学を取り巻く状況について概観してみることにする。

まず、西洋の著名童話と日本の子どもたちを結びつける最初の試みとなったその翻訳の内容を確認することからはじめよう。新たに見つかったグリム、アンデルセンの翻訳は、すべてローマ字でつづられているもので漢字やかなは一切使用されていないが、ここでは理解しやすいように一般の日本語表記に改めたものを掲載する。

【「羊飼いのわらべ」】

《今は昔、一人の童^{わらべ}ありけるが、生まれつき賢くして、いかなる問^いを出^{いだ}すともこれに答えずということなし。かかりければ、世の評判いと高く、国王の御耳^{おんみみ}に達しけり。王は事のあまり大きやかなりければ、真^{まこと}とも思^{おぼ}さざりしが、いでこれを試みにとてこの童^{わらべ}を呼ばしめたり。》

【「王の新しき衣裳」】

《今は昔、ある国に一人の王様ありけり。ことのほかに御召し物の美しきを好みたもう御癖ありて、つねづね御衣の善し悪しにのみ御心を留めたまい、終日御衣裳部屋に入りたまいて、あれのこれのと着飾り見比べたもうことも多かりき。》

最初の「羊飼いのわらべ」が掲載されたのは前述したとおり「子どものため」という欄であったが、一方の「王の新しき衣裳」のほうはそれとは違って、「雑録」欄に掲載されたものである。それぞれ掲載欄は異なるが、二つの訳文を読み比べて、どこか違いが見いだせるだろうか。もちろん原文はすべてローマ字でつづられているものだから、漢字や送りかなのことは度外視してかからなければならない。少なくとも文章の難易という点に関しては、「雑録」欄に掲載された「王の新しき衣裳」と、「子どものため」という欄に載った「羊飼いのわらべ」との間に、何ら違いはみられない。強いて違いをあげれば、物語全体の長さが、前者は後者の三倍強に達するという点ぐらいではないかと思う。双方とも西洋の童話を原作としたものであり、文章の上でも違いがないとすれば、「王の新しき衣裳」も、「羊飼いのわらべ」と同様、子どもが読んでも一向に不都合のない翻訳であったということになる。

このように、『ローマ字雑誌』は、そこにグリムやアンデルセンの童話を掲げている点において、そしてその目的をはっきりと「子どものため」と特定している点において、日本の児童文学史上特筆に値する雑誌であったということができるのである。

今ではすっかり忘れられてしまった『ローマ字雑誌』という雑誌がそのような歴史上の大役を担うことができた原因は、一体どういうところにあったのか。それは、この雑誌の発刊の目的と深く関係している。もともと『ローマ字雑誌』というのは、漢字の読み書きを覚えるのに費やす多大な労力を省いて、すぐに西洋の新知識を吸収できるようにという趣旨のもとに進められた、ローマ字使用運動の一環として発行された雑誌である。その運動は、明治十六年頃から盛んになってきた大槻文彦らの「かなの会」（国文を平仮名でつづろうという運動を提唱）に対抗するものとして、明治十八年一月に外山正一や矢田部良吉、神田乃武ら西洋の言語、文化に通じるものによって組織された。「羅馬字会」というのがその正式な名称であったが、「かなの会」との違いを示すために、ローマ字を学べば《西洋の語》を学ぶことも容易になる、あるいは《文明開化の新鮮なる空気を吸ふことも大いに易しく》なるという点を力説した（「羅馬字会趣意書」）。そうした西洋の文化や文明を吸収する手段としてのローマ字学習を助長するために発行されたのが『ローマ字雑誌』であったというわけである。

漢字を覚える労力を省きすぐに西洋の新知識を吸収するという目標をおく以上、その読者として、これから和洋の学問や言語を学ぼうという小中学校の生徒を視野に入れていたのは当然のことである。一方、その雑誌を支える幹事や寄稿者には、日本の近代教育の礎を築いたG・F・フルベッキやB・H・チェンバレンをはじめとして、外山正一や矢田部良吉、井上円了、田口卯吉など当時の学校教育と関係の深い学者や西洋の事情通が顔をそろえていた。彼らにとって、手もとの文学書や、当時一般に流布していた外来の教科書などを渉猟すれば、『ローマ字雑誌』に掲載されているような西洋童話の原文（ないしは英語訳）を見つけだすのはさほどむずかしいことではなかったろう。『ローマ字雑誌』が日本で最初の西洋児童文学の紹介の場となったというのも、当然なるべくしてなったと考えることができるのである。

ちなみに、これらの記念すべき翻訳を手がけた人物であるが、双方にはそれぞれ「羊飼いのわらべ」が「かたやま きんいちろう」、「王の新しき衣裳」が「やすおか しゅんじろう」と名前がローマ字でそえられているが、残念ながら彼らの正式な漢字名や経歴については何もわかっていない。あるいは、外山や矢田部の周辺にいた人物かと思って、当時の東京帝国大学や高等中学校の名簿などを調べてみたが、そうした名前は見あたらなかった。詳しいことは今後の研究にまたなければならないだろう。 続く（中央大学教授）